



## 年間第 22 主日 (ルカ 14:1,7-14)

末席に座ってあなたと食事を共にしたい

今週は都合により公開ミサを中止しております。ミサ中止は日曜日までですので、月曜日からは再開したいと思います。私の心の中では、よからぬ思いと本来のあるべき思いと両方があります。「よからぬ思い」とは、7月24日に公開ミサを止めて非公開のミサをささげ、それをYouTubeにアップしましたが、通常80回ほどの視聴回数が240回を超えていました。

一人で喜びたいなら、非公開のミサを選ぶでしょう。こんなにたくさんの方に観てもらえるのですから。しかし、一人でミサをささげる寂しさはたとえようありません。もちろん、参加できないすべての人と、心を合わせていますが、人間ですからそれを目で確認できないのは気持ちの入り方が違う気がします。

「招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。」(14・10)

「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」(同13) この箇所を読み返しながら、今回初めて、自分が浦上教会に赴任して間もない頃の出来事を思い出しました。

もう30年も前のことです。広い管轄区域の信徒と親睦を深めるため、宴会の席もしばしば開かれていました。司祭の霊名のお祝い会、敬老会、さまざまな機会に食事とお酒の席が設けられました。浦上に入って一年目、主任神父様と先輩の助任神父様たちはそれぞれ思い思いの席に出向いて、信徒の皆さんに飲み物を勧めていました。司祭に飲み物を注がれた信徒はきっと嬉しかったでしょう。

しかし私は、先輩たちのように気軽に信徒の席に飲み物を勧めに行くことができませんでした。まだ誰も、顔を覚えていない中で、お酌をしに行くのは私には不可能でした。それはそれはショックだったことを覚えています。会場は賑やかに盛り上がり、宴もたけなわなのに、私一人司祭の座る席から動くこともなく、茫然としていたからです。

あとで分かりました。先輩たちも新人の時に同じ思いをしたし、当てもなく注ぎに行っているのではなく、声をかけてもらえるのを待っている信徒に上手にお酌をしに行っていたのです。そうやって先輩も自分たちの姿を見せながら、私の巣立ちを促していたわけです。しかし私はなかなか巣立ちができませんでした。そこは本当に苦勞した点でした。

主任司祭に、または助任司祭に飲み物を注いでもらっただけで、信徒がどれだけ嬉しいか、今ならよく分かります。初めての主任司祭を経験した太田尾小教区で、お祝い会の席で民謡とかの出し物があると、よくスータン姿のまま飛び入りで混じったものでした。本来なら私が入ると調子を狂わせてしまうはずですが、いつも歓迎してもらい、会場は大盛り上がりでした。民謡を踊った後に一通り飲み物を注いで回ると、いろんな人からふだん聞けない話を聞くことができたのです。

「招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。」（14・10）  
「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」（同 13）末席まで座りに行くと、この日の会場の様子が手に取るように分かります。様々な不自由を抱えている人に来てくれてありがとうと感謝を伝えると、会場全体が喜びで満たされます。

何かを当てにしているではありません。一人一人に、私はあなたのそばにいるよ。今日あなたが来てくれて嬉しいよと素直に伝えたい。そのためだけに末席まで行き、飲み物を注ぎ、すべての人と同じ食事を食べるのです。

もちろん、こんな経験を積み、生まれ変わったように社交的な人になれるかと言うとそうではありません。私は基本的には社交的ではない人間です。だからこそ分かるのです。末席まで出向いて座ることは、どんな知識や経験よりも人を納得させるということ。

初めに受けたショック。主任神父様も先輩助任神父様も末席に座って嬉々としているのに、自分は浦上教会の広い信徒会館で一人ぼっちになっている。そのショックが、末席に座る大切さ、お返しのできない人を招く大切さを痛いほど教えてくれました。

今は、コロナの時代でなかなか会食もままなりません。いちばん楽しかった時代が、もう一度やって来ることを心から願っています。末席に座ってお酒を酌み交わし、嬉々として宴会を楽しむ日が一日も早く来るように、「へりくだる者を高められる」主に願いましょう。